



遊覧船がゆき、山を背に、波と帆掛け船が空を舞う（上、『霞ヶ浦写真館』より転載）
大の城炭録（右）
『写真紀』より転載
正期『写真紀』より転載



霞ヶ浦周航（遠漕）のはじまり

日頃からボートに慣れ親しんでいれば、霞ヶ浦周航（遠漕）に挑もう、というのは当然の理（ことわり）。その試みは、本校校歌を作曲した尾崎楠馬先生（小紙22号で詳述）の一言で始まった。『進修』第13号（明治43（1910）年1月30日発行）の「鹿島遠漕記事（橋本芳雄（中9回卒）」には、その経緯・状況が丁寧に書き留められている。それを現代文風に整理して追ってみたい。

「明治42（1909）年8月7日、田村弁財天先で水泳練習が実施される。遠泳の試験も無事終わり、一同芝の上で休んでいると、『さて、いよいよ明日で水泳（練習）も終わる。ところで、一同遠漕は如何か』と、尾崎先生が発議。もちろん生徒たちが日頃から熱望していたことであり、たちまち『賛成々々』の叫び声。鹿島への遠漕が決まる。

8月9日、端艇『桜』に尾崎先生と生徒8名、『霞』には舟本氏と生徒8名が

乗り込み、午前6時、川口の艇庫を出発。田村弁財天、沖宿、沖宿から対岸の大山鼻へ。その後、難所と言われる三又沖を過ぎると、浮島が大きくなり、湖上には木原方面からの蒸気船や帆を張った高瀬船も行き交う。

牛堀を前に、一同湖に飛び込んで汗を流し、『桜』組は赤、『霞』組は青のユニフォームに着替え、10時過ぎに牛堀に上陸。子どもたちは、珍しげに駆け寄り、女たちは『此の暑さにまあ』と、驚き顔。生徒たちはすこぶる得意顔。昼食の弁当を平らげ、30分ほど休憩。飲料水を積んで、潮来へ向けて出発。潮来からは前川を経て北浦へ、ほどなく大舟津に到着。湖岸に面した新しい学校（補足、大舟津小学校か）にボートを着け、ボートの係留を依頼するも、小使の爺さん、頑固で全く話がわからず（あいにく校長以下教職員が研修のため留守であった）、役場まで行って許可を受ける始末。役場の職員に向いてもらって、やっと爺さんを納得させた後、徒歩で鹿島の町に向かう。宿泊は鹿島小学校を借用。部屋は小さな裁縫室、暑さ、蚊、蚤に閉口するも、尾崎先生が奏でるオルガンの一曲一節に癒されながら、生徒たちはいつの間にか眠りに落ちていった。

8月10日は、鹿島神宮に詣で、鹿島灘で海水浴。波の荒い鹿島灘。霞ヶ浦の波に慣れ親しんだ生徒たちは、当初は恐る恐るであったが、馴れるに従って、一日海水浴を満喫。

8月11日、目を醒ますと、空は曇り、強い風。これで帰れるかと少々心配に。しかし行けるところまで行こうと、午前7時30分、大舟津を出発。波が高く、飛沫が顔にかかる。北浦、前川、潮来を経

て、ようやく牛堀に到着。女たちは『この浪にまあ』と、驚きの声。なかの一人が『お前等、命が惜しくないなら行くがよからう』とまで言い放つ。これには生徒達たちが驚き顔。それでも牛堀では万事都合が悪いので、とにかく麻生まで行くことに。波は高く、前を行くボートの底部がみえるほど。必死にオールを漕ぎ続け、やつの思いで麻生に到着。『行くべきか、行かざるべきか』、議論が二手に分かれるも、暴風警報が出るにおよび、麻生に留まることに。帰省中の同級生のはからいで柏屋に宿泊。警察より電話で土浦に連絡してもらい、尾崎先生は校長に電報。校長よりの返電は『イソグナ、ジチヨウセヨ』。言、簡にして、意、深重。これよりしばらく『自重』の語が生徒たちに大いに流行。

翌日8月12日は雨も降らず、風もなし。一同は喜び勇んで麻生を出航。天王崎、浮島を越え、大山鼻を廻り、沖宿で小休止。田村弁財天で一泳ぎ、昼食をすませ、ボートの清掃。その後、木陰で茶話会（母校では心配をしていたと思うが、なんとものんびりとした話だ）。尾崎先生が当時、流行っていた歌をまねて、『シャブ、シャブ、シャブと漕ぎ来るは、土浦中学水上部の遠漕隊、色は真黒気で歯が白い、オール握ってバックをきかす、大舟津の頑固爺、鹿島の学校で蚊に喰われ、麻生の柏屋で菓子を食べる』。オールに合わせ一同でこの歌を歌いながら、午後4時、無事川口着、『水上部万歳！』を三唱して解散となった。

そして、最後に橋本氏は「金は要らず、自由で、しかも面白く、且つ勇気を増し、意志の鍛錬になった此の行も、無事これで終わりを結んだ」と記し擱筆してい

る。これ以後、後輩達も「山と立ちくる大波も 千尋の底の淵とても 慣れて我家に異ならず 嵐も強く吹かば吹け なんとぞ恐れん海国男子」（『進修』第18号）と、意気高くして遠漕をたびたび試みていく。それらを仔細にした記事が『進修』誌上を飾っている。

- 『進修』第17号（大正3（1914）年2月発行）「鹿島遠漕記」5年稲葉三郎
- 『進修』第18号（大正4（1915）年3月発行）「香取遠漕記」4年菊地 武
- 『進修』第22号（大正11（1922）年7月発行）「鹿島に向けて遠漕」
- 『進修』第23号（大正13（1924）年7月発行）「牛堀まで遠漕」

彷彿させる情感「琵琶湖周航の歌」

第三高等学校（現京都大学）の生徒であった小口太郎が、大正6（1917）年、琵琶湖一周の漕艇中に作詞したのが「琵琶湖周航の歌」（作曲は吉田千秋、三高寮歌。1971年に加藤登紀子がカバーし、ポピュラー音楽として一般に知られる）。吹かば風吹くままに、波立たば波立つままに」の情感たつぷりに、行く手はるかに筑波の峰を仰ぎつつ、茫々たる湖上でオールを握っていたに違いない。



潮来市（旧牛堀町）永山から見た霞ヶ浦に沈む夕陽（上、平成24年5月撮影）
鹿島神宮拝殿（下、平成19年8月撮影）